

令和6年度 生徒指導推進計画

大竹市立玖波中学校

1 教育方針

(1) 学校教育目標

「『なりたい自分』に向かって挑戦する生徒の育成」

(2) 学校研究主題

「自らへの自信をもち、主体的に学びに向かう生徒の育成」

～個別最適な学びと協働的な学びで思考を深める授業づくりを通して～

(3) 校訓

「実行の人」

2 生徒の実態や課題とつきたい力

全体的に素直で真面目な心優しい生徒たちであり、落ち着いて学校生活を送ることができている。多くの生徒は小学校からクラス替えがなく、ほぼ同じメンバーで日々の学校生活を過ごしてきた。そのため、相手に自分の思いを直接伝えなくても仲間が察してくれる関係が成り立っている。互いに仲良く過ごすことを好み、自分の殻を脱しきれないところに課題が見られる。3年生20名は、2年生後半から学校の新しいリーダーとなり、一人一人に役割が与えられる中、学校を引っ張る自覚が芽生えている。公民館などのボランティア活動にも率先して参加するなど何事にも地道に一生懸命頑張ることができる。それぞれが自分の進路に向けて、夢をもち、自己を認識することで自分の夢の実現に向けて、一歩ずつ歩みを進めさせ、自己決定へと結び付けたい。2年生19名は、明るく快活で男女問わず人間関係が良好である。個性を認め合いながら主体的に考えて行動する場面が見られ、特別支援学級生徒とのつながりも温かく自然に接することができるようになった。互いの成長の賜物である。今後も温かい人間関係を、中堅学年として、またよき先輩として1年生との間でも築きあげさせたい。1年生12名は、小学校のリーダーとして頼られ本校への入学に至っている。中学校でも学級活動や行事等を通して良いところを伸ばしていきたい。また、生徒の個性や繊細さを踏まえ、教職員間の連携及び家庭や専門機関との連携を通して、中1ギャップを乗り越えられるよう努めたい。

以上の実態を踏まえ、全体として51名の小規模校であるからこそ、次の3点を意識しながら、一人一人が夢をもち、自らの成長に自信をもって様々なことに挑戦し続けることのできる生徒を育てていきたい。まず1点目は、縦割り集団活動の充実である。上級生がより良い見本を見せながら下級生を育てる。昨年までの縦割り集団活動を継続させ、さらに目的意識や仲間意識をもたせることで活動を充実させ、自己有用感を育てていく。2点目は表現活動の場の設定である。昨年度も学期末や行事後等、学級委員や実行委員の生徒たちが振り返り、思いを述べる場面を設定してきた。活動や思いを整理し振り返る中で、自分たちを支えてくれている周りの人たちの存在に気付かせることで感謝の気持ちを育みたい。3点目は「あ・そ・ぼプロジェクト」(あいさつ・掃除・ボランティア)の展開を柱とする生徒会活動の充実である。生徒会執行部及び委員会の活動を可視化できるよう、掲示物の充実や表彰による賞賛を意識して行う。また、体育祭に向けた取組で勝敗にこだわるなど、挫折や壁を乗り越える経験を通してレジリエンスの向上につなげたい。新型コロナウイルス感染症が5類に分類されたことで、今年度はさらに学校行事や生徒会活動等を充実させることが可能となるため、少人数だからこそできることを創意工夫することで、自分たちの活動を振り返って次の活動につなげる場面を仕組んだり、自己の成長をメタ認知させたりして、夢の実現に向け一歩を踏み出せる力を育成したい。

(1) 学習面

令和5年度1月に行った1・2年生の実力テストの結果、1年生は全国平均を4つの教科で上回り、1つの

教科が数ポイント下回った。2年生は全国平均を上回る教科が3教科、2教科は数ポイント全国平均を下回った。全体的に授業中は落ち着いて学習に取り組むことができ、振り返り等の記述には全員が集中して取り組むことができている。質問ができる生徒は増えてきているが、積極的な発言ができる生徒が固定化していることは課題である。また、家庭学習は定期テスト前には定着している生徒が増えてきたが、普段の生活での家庭学習習慣には課題が見られる。学習時間や学習内容・方法等、個々に課題は異なるため、引き続き学習の個性化と指導の個別化による一人一人にあった学習支援が必要である。

また、授業の中でユニバーサルデザインや生徒指導の実践上の4視点(自己存在感を与える、自己決定の場を与える、共感的な人間関係を育成する、安心安全な風土を醸成する)を生かし、積極的に発言、質問できる生徒を増やし、集団づくりを通して仲間との関わりの中でより主体的に授業に参加させる。

(2) 生活面

伝統的に3年生によるリーダーシップや、実行委員会を組織しての行事の取組に特徴がある。しかし、全体的に言われたことはよくやり、自ら考え判断して行動しようとする姿勢がみられるようになってきた。リーダーの育成を通して、縦割り集団での取組を充実させ、少人数ならではの良さを生かした自主的な態度を育む。

(3) 対人関係

小学校からクラス替えもなく人間関係が固定化している。相手のことを察したりすることはできるが、自分の気持ちを整理して言葉で伝えたり、積極的に発言することに課題が見られる。縦割り集団の活用や行事への取組の中で、時に競い合うことで互いに成長し、一つずつ壁を乗り越えていけるよう仕組んでいく。また、今後は学級や生徒会活動、学校全体の場等表現する機会を増やすことで自己を認識し、周りの誰かのために行動できる力を育成する。

(4) 問題行動

令和5年度は、SNSをめぐるトラブル(1年生)、生徒間暴力(3年生)、保護者の勧めによる友人宅への外泊(3年生)、親子間での感情のすれ違い及び指導をめぐる教員との意思疎通不足による飛び出し(2年生)、生徒間トラブル(1年生)等の事案が発生した。警察や西部子ども家庭センター、市福祉課等関係諸機関、SCと連携しながら、生徒双方への対応及び保護者への対応を行っている。該当生徒と保護者にはSCによるカウンセリング等今後も継続する。この他、生徒間暴力(3年生男子)、生徒間トラブル(1年生女子)があった。それぞれの問題行動に対し、学年を中心に複数で対応し、管理職に相談しながら指導を進めた。生徒に自分の言動を振り返らせ、何がいけなかったのか、今後どうしていくのか等考えさせ、自分の言葉で語らせた。今後も日常的に生徒の様子をよく見て、小さな言動、生徒の変化を見逃さず、積極的生徒指導を継続し、問題行動を未然に防ぐよう努める。また、SCやこども相談室等との連携を図り、専門的な立場からのアドバイスも得ながら生徒の情報を共有していく。

(5) 不登校

令和5年度は1年生3名、2年生1名、3年生1名。

※ 以下の口内の内容は校外に出さない。

3年生1名(男子)については、繊細で対人関係の不安から不登校となっていたが、2年時にはリモートで1日3時間授業に参加したり、別室登校して技術家庭科の授業に参加したりと徐々にほぐれてきている。

2年生1名(女子)は、1年時は通常学級に在籍していたが、2年時から特別支援学級(自閉・情緒)に在籍する。イラストを描くことが好きで人懐こい人柄だが、さみしがり屋の甘えん坊でもあることから、SNSで知り合った男性との間でトラブルを起こしたり、基本的な生活習慣を家庭で育むことが難しい状況があったりする。IRISAや市福祉課等の協力や連携により、2学期後半には週1・2回ペースで登校でき始めたが、家族からの暴力を理由に西部子ども家庭センターに一時保護され、現在に至る。今後の進路について、市福祉課や西部子ども家庭センターとの連携を継続して考えていく。

新入生1名(男子)は、家庭の事情で廿日市市津田から保護者の送迎により登校する見込みであり、保護者の都合による遅刻や欠席が予想され自力での登校に向けた支援が必要である。

校内適応指導教室(ふれあい教室)については、今年度末まで3年生女子2名が毎日使用していた。2

年生男子1名、1年生男子1名も必要に応じて使用していたことから、今年度も開設の必要があり、週5日2時間から5時間の計20時間は、教員がついて実態に応じた指導にあたる。

3 生徒指導の基本方針

(1) 生徒指導目標

一人一人の生徒を尊重し、仲間づくりを行う中で自己存在感を味わわせ、個性を伸ばすとともに、社会の一員として逞しく生きる態度を身につけさせる。

(2) 指導の重点目標

- ① 積極的生徒指導の推進による問題行動や不登校の未然防止
- ② 生徒理解のための連携(保護者・地域・小学校・スクールカウンセラー・関係機関)
- ③ 生徒指導体制の確立(情報連携・抱え込みの排除)

(3) 指導の基本理念

- ① 全教育活動において、生徒との関わりを積極的にもち、自分の力で問題や悩みを解決し、自己実現をはかることができるよう援助する。
- ② 生徒一人一人の良いところをほめて、個性を伸ばし、集団の中で自己存在感を実感させ、精神的な安定を図る。
- ③ 教師一人一人がカウンセリングマインドをもち、生徒との共感的理解に基づいた人間関係を確立できるように努める。

(4) 具体的な指導

- ① 全教育課程に生徒指導の実践上の4視点(自己存在感を与える, 自己決定の場を与える, 共感的な人間関係を育成する, 安心安全な風土を醸成する)を生かし、共通理解のもとに、積極的な生徒指導を進める。
 - ・各教科の授業で生徒指導の三機能を具現化させる。
 - ・道徳教育の推進により、生徒の内面から思いやりの心を育て、規範意識の向上を図る。
 - ・ことばの教育の推進により、社会に通用する人間性を育て、自信をもって自分の考えを述べることによりコミュニケーション能力を向上させる。
 - ・学習指導と部活指導の充実を図り、生徒に自信とやる気を育てる指導をする。適宜部長会の開催、部活行事の取組を充実させ、縦割り集団を活用し、リーダーシップと自主性を育てる指導をする。
 - ・名札の着用、規程の通学カバンの指導により、集団としてのまとまり、帰属意識を高める指導をする。(今年度よりスラックスとスカートの選択が可能)
 - ・上級学校訪問、職場体験、集団宿泊学習など体験型の学習を通して社会性の育成を図る。
 - ・生徒会活動等で他校と交流させたり、自己表現の場を設定したりすることで自己肯定感及び自己有用感を高める。
 - ・生徒指導規定の見直しなど生徒の実態に応じた対応を行う。
 - ・生活の記録の活用、教育相談の工夫により生徒とのコミュニケーションの充実を図る。
- ② 特別支援教育推進委員会、教育相談担当者会を中心として、不登校生徒および特別支援が必要な生徒への支援方法の検討、実施を進める。
 - ・週に一度、教育相談担当者会をもち(SC及び大竹市こども相談室等関係機関と連携)、各学年生徒の情報交換、不登校生徒に対する支援方法の内容を検討する。
 - ・資料の準備及び進行は、特別支援教育コーディネーターが行う。
 - ・毎月の職員研修会で、各学年生徒の情報交換を行う。
 - ・スクラム+として、地域の玖波小学校、広島西特別支援学校との連携を深める。
- ③ 学校長のリーダーシップのもと、生徒指導部を中心とした組織的な指導体制の中で指導を進めていく。
 - ・管理職、生徒指導主事、特別支援教育コーディネーター、学年主任、教職員が報告・連絡・相談を相互に取り合う。
 - ・組織としての指導を行い、各指導の指導記録を作成し、生徒指導主事が集約する。
 - ・問題行動が起きた時の基本的な指導の流れ(別紙)

- ④ 地域や保護者との連携を深める。
- ・各種通信及びホームページ等の情報発信を積極的に行う。
 - ・家庭連絡, 家庭訪問を確実にを行い保護者との信頼関係を築く。
※生徒の良い面も積極的に連絡していく。
 - ・学級懇談会, 部活参観等を通じて, 保護者や地域の方とのつながりを深める。
 - ・民生委員との懇談会において情報を共有し, それぞれの立場で支援できる内容を明確にする。
 - ・学校評議員及び学校関係者評価委員との連携を図る。
- ⑤ 校内美化と学校環境・教室環境の整備
- ・生活委員を中心に教室環境整備を呼びかけ, 生徒全員で教室環境美化を意識させる。
 - ・学級掲示, 校内掲示を充実させる。
 - ・縦割り掃除を行い, 3年生のリーダーを中心とした掃除の取組を進めるとともに, 掃除を一生懸命できていることへの賞賛と評価をすることで, 自己有用感の向上につなげる。
- ⑥ SCによる教育相談体制を進める。(昨年度は火曜日)
- ・年度初めに1年生への個別のカウンセリング及び全学年へのエンカウンターの授業をすることで, SCと生徒との顔合わせ及びつながりづくりを進める。
 - ・気になる生徒を中心に授業や休憩時間など観察し, 必要であれば個別のカウンセリングを行い, 医療機関につなげる。生徒指導主事, 担任, 保護者と連携をとる。
 - ・生徒指導上の課題に対してその生徒との教育相談を行う。必要に応じて保護者との連携及び西部子ども家庭センターや医療機関等と連携する。
 - ・教育相談担当者会で最近の様子・変容を報告する。
 - ・校内研修会を実施していただき, 助言をもらう。
 - ・新1年生を対象に全員SCによる教育相談をする。
- ⑦ 生徒会活動, 委員会活動の充実
- ・生徒会執行部のリーダーの資質を育成する。
 - ・生徒会行事を生徒に自主的, 計画的に運営させるよう支援する。
 - ・目的やねらいを明確にして, 主体的な活動を工夫させる。
 - ・他校の執行部との交流を行い, 他校の行事への取組や日頃の生徒会活動の実践に学び合う。
 - ・生徒指導の目標と生徒会の取組を連携させ, 全教職員の共通認識のもとで取り組む。
- ⑧ 部活動の充実
- ・部活動に関する規程を基に全教職員で進め, 規程を徹底させる。
 - ・部長会を定期的に行き, 部活動が自主的な運営になるよう支援していく。
 - ・顧問はなるべく部活動につき, 挨拶, マナー面についても指導する。
 - ・大会前の1週間は「部活頑張り週間」とし, なるべく会議や行事は入れない。